逆輸入されたカーゴカルト
―ヴァヌアツ、アネイチュム島における観光と開発―

福　井　栄二郎*

Cargo Cult as Reimported:
Tourism and Development in Aneityum, Southern Vanuatu

FUKUI Eijiro

要　旨　ヴァヌアツ・アネイチュム島では観光業を発端として、島が緩やかに対立しはじめた。本稿はこの対立を両面から描く。まず観光推進派からすれば、観光業は島に開発をもたらすものであった。それは観光業にとどまらず、多方面への投資、開発が推奨される。進歩や発展を含意する「開発」の思想や実践は、観光業だけではなく、人間の変革も含意している。若者のなかには蓄財がビッグマンになれる手段だと考える者も出始めた。他方、観光慎重派からすれば、これは大きな誤りである。ビッグマンになるには、個人主義に走らず、島の人々に「分配」をしなければならない。つまり「目的のための手段がおかしい」ということになる。「合理的な目的と非合理的な手段の結びつき」をカーゴカルトの定義とするならば、開発の思想と実践はカーゴカルトと親和性をもつことになる。本稿では、一度は放逐された「カーゴカルト」概念を手掛かりに、彼らの「誤った理路」を探求する。

キーワード：カーゴカルト、観光、開発、ヴァヌアツ

In this world there are only two tragedies.
One is not getting what one wants,
and the other is getting it.
オスカー・ワイルド『ウィンダミア卿夫人の扇』

1．メラネシアを離れたカーゴカルト

グローバル化の時代は社会を劇的に変化させる。そして文化人類学が扱うような小さな社会では、そのインパクトはより大きなものとなる。では、このような社会変化をどう捉えればよいのだろうか。

かつてオセアニア人類学では、西洋の影響により急変する社会と人々の混乱を集中的に論じたことがある。19 世紀から 20 世紀にかけ、植民地行政が浸透し、大量に白人が流入したメラネシア地域において、彼らを驚愕させる運動が頻発したのだ。霊的な力をもつ者や預言者によって導かれるその運動は、細部に多様性はみられるものの、それでもある

* 島根大学法文学部社会文化学科

種の特徴を共有している。ある日、死んだ祖先や親族、仲間たちが、海の向こうから大量の富（カーゴ）を携えて帰って来るという信念。そのための港の建設や滑走路の整備。豚の屠殺や現金の廃棄にみられる蓄財の放蕩。カーゴを入手するための儀礼的な手段。身体の痙攣。富や技術が白人たちに不当に横取りされているという疑念。そこから生まれる反白人、あるいは反植民地の思想。この運動を目の当たりにし、危険視した白人たちは、これらの運動の総称としてこう名付けた。「カーゴカルト」。

リンドストロームによると、はじめて「カーゴカルト」という語が登場したのは1945年、『Pacific Islands Monthly』という雑誌であるとされる［Lindstrom 1993: 15］。その後、この用語は植民地行政官から人類学者へと手渡されることになる。春日は、人類学者の分析を時系列的に4つに大別している［春日 1996］。最初期は「狂気」である。身体の痙攣や宗教的熱狂の異常性に焦点を当て、この運動は現地住民の狂気や精神疾患、あるいは精神的な未熟さと結びつけられた。2番目は「未開人の理性」で、ある意味で人類学者お得意の分析であった。つまり、メラネシアの人々は植民地行政下で虐げられ、白人の富に対する理解も不十分なまま、それでもそうした社会・経済的問題を彼らなりの合理性で解決したのだという論調である［Lawrence 1964, cf. 棚橋 1996: 139］。この時期の代表的な論者にワースレイがいる。

> われわれはこれまで、不安定で予測不可能な特徴を持つヨーロッパ経済とその政治秩序が原住民の心に混乱をひきおこしたことを学んだ。また好況とか不況といった経済の変動、それに伴う利潤の減少、ドイツ、オーストラリア、日本、イギリス、オランダ、フランスといった植民統治政府の交代、共同統治とか信託委任領という多様な統治形態、世界大戦による破壊や混乱といったような現象を見てきた。こうした社会的背景や土着宗教の存在を考慮に入れると、千年王国運動は現実からの非合理的な逃避とか現在から過去への逆行としてよりは、むしろ合理的には説明できない矛盾に満ちたヨーロッパの支配秩序に対する、原住民の極めて合理的な解釈ないし批判だと考えることができよう。［ワースレイ 1981: 316-317］

ワースレイにとってカーゴカルトは、社会・経済的な抑圧に対するメラネシア人の抵抗であり、それはナショナリズムの萌芽でもあった。

この「未開人の理性」という考え方をさらに発展させたのが3番目の「カーゴイズム」である。つまりメラネシア人には本質的にカーゴ的思想（カーゴイズム）が備わっている。それは独自の文化観、歴史観に根差したものであり、西洋のそれとはまったく異なるものである。こうした世界観から見ると、カーゴカルトの実践は奇妙なことでもなんでもなく、むしろ「正常」な反応なのだということが強調された［Harding 1967, Errington 1974］

そして1980年代後半になると、カーゴカルト運動そのものよりも、人類学者の言説そのものが分析の対象となった。つまり「メラネシア人」を「われわれ」とは断絶した他者として措定し、異質なものとして描き出す語り口が批判されたのである。それはひょっとすると「カーゴカルト」というカテゴリーを

捏造して、メラネシアの各地で起こった「社会運動」や「ナショナリズム」や「生活改善運動」の実践を、十把一絡げに放り込んでしまったのかもしれない。そしてその背景には、「メラネシア人」と「われわれ」はまったく異なるのだという、本質主義的で差別的な見方があったのかもしれない。こうして「カーゴカルト」というカテゴリーの無効化が宣言されることになる［McDowell 1988, Buck 1988］。フィジーのトゥカ運動を精査したカプランは、社会運動としての側面に着目し、それは「カーゴでもカルトでもない」と結論づけた［Kaplan 1995］。

現在も議論は続いている［Jebens（ed.）2004, Tabani and Abong（eds.）2013］。その多くは、かつて「カーゴカルト」とされていた運動を、別の視点から分析するものである［Sullivan 2005, Tabani 2008, Abong 2013］。例えばパプアニューギニア・マヌス島で起こったパリアウ運動は、主導者パリアウの死後も「ウィンド・ネーション」として活動を継続しているし［Wanek 1996, Smith and Schwartz 2021, cf. Otto 1992］、ヴァヌアツ・タンナ島のジョン・フルム運動は、観光化して多くの観光客を呼び寄せている［Reeves and Cheer 2015］。これらを踏まえると、一部、擁護の声はあるものの［Otto 2009］、メラネシアの運動に対して、不用意に「カーゴカルト」という差別的な語を用いるべきではないというのが現在のトレンドかもしれない［Jebens 2004］。ただし、ここで留意すべきは、カーゴカルト脱構築論が議論されたのは 1980 年代後半、ちょうどオリエンタリズム批判に端を発したポストモダン人類学の思潮が勢いを増す時期だったということだ。つまり、カーゴカルト概念が放逐されたのは、ある部分までは政治的正しさの問題でもあった。これにより、たしかに人々の運動は「狂気」でも「幼稚」でも、あるいは「彼らなりの理性」でもなくなった。だがそれはメラネシア人が「他者」ではなくなり、「われわれ」と地続きの存在になったことを意味した。では彼らの「非理性」や「よくわからないもの」は霧消したのだろうか。

他方、カーゴカルトが含意していた「非理性」は、われわれに引き継がれた。1990 年代からカーゴカルト研究を牽引してきたリンドストロームは、氾濫する「カーゴカルト言説」の分析を行っている。彼自身は、1993 年の著書のなかでカーゴカルトをこう定義している。「最も単純化された描写において、カーゴカルトの精査された本質とは、合理的な目的と非合理的な手段の――つまり、偽りのない欲望と効果のない実践の――悲劇的な関係性である」［Lindstrom 1993: 185-186］。つまり彼にとって、カーゴカルトはメラネシア独自の現象ではなく、普遍的な欲望のメタファーとして捉えられている［Lindstrom 2000, 2013, 2018, 2019］。

その一例として彼は「現代のカーゴカルト」と題されたカートゥーンを示す（図 1）。私たちの物欲や性欲、あるいは出世欲はとどまるところを知らず、しかもそれは非合理的な回路を通して発出される。

それだけではない。インターネットが普及し、グローバル化が進行することで、このカーゴカルト言説は、欧米を中心にますます増殖する。つまり敵対する政治家への中傷として、疑似科学への警鐘として、うまくいかないビジネスモデルへの揶揄として、「カーゴカルト」という言葉が用いられるのだ。あるいはロックバンドの歌詞や芸術家のモチーフや、舞台のテーマとしてもたびたび登場する［Lindstrom 2013: 174-182］。ここまでくる

図１　現代のカーゴカルト（[Lindstrom 2013: 171]）

と、カーゴカルトは、むしろ西洋に特有の現象であるかのようにも思えてくる。彼は言う。「カーゴ・ストーリーは、現代の私たちが経験している欲望の寓話である。この欲望は魅惑的であり、恐ろしくもあり、また侵食性がある。私たちはカーゴに対する欲望の犠牲者であり、また近代そのものの犠牲者でもある。私たちは愛と商品の両方の欲望に支配され、ひどく苦しめられているが、この欲望はとても心地よいので、傷ついても諦めることはないように思える」[Lindstrom 2000: 295]。この満たされることのない欲望は、高度資本主義の病理であり、宿痾である。リンドストロームにとって、これまでのカーゴカルトの人類学的分析とは、この西洋人の肥大する欲望をメラネシアの実践に投影したものに過ぎない。

本稿では、このカーゴカルトの議論を念頭に、ヴァヌアツ・アネイチュム島の事例を検討する。島ではここ数年、観光業が盛況を極め、大量の現金が落ちるようになった。島民たちは、これまで買うことができなかった、高価な電化製品や船外機付きボート、ソーラーパネルなどを手に入れられるようになった。他方、観光業に従事することで、島民たちは多忙にもなった。島民たちの間で意見の相違も生まれるようになり、これまで比較的、平等で一枚岩だった彼らのなかに、緩やかな対立が生じたともいえる。本稿はこの緩やかな対立を両面から論じることで、社会の変化と多層性を明らかにする。

筆者は2000年以来、この島で断続的にフィールドワークを行っており、これまでにも島の観光業に関する論考を執筆してきた[福井 2006, 2012, 2017, Fukui 2020]。しかし、2020年以降、世界規模のコロナウィルスの蔓延に伴い、ヴァヌアツは2020年3月に国境をロックダウンする。これによって現在（2022年1月）に至るまで、観光客の入国は許可されていない。また筆者自身も調査が行えず、2018年1月～2月に行った現地調査が現段階での最新のものとなる。本稿で示すインタビューは、主にそのときのものを使用している。本稿ではそうした限られた資料を補うため、ヴァヌアツの有力紙『Daily Post』のインターネット版を活用し、人々の動向を把握する。

2．アネイチュム・クルーズ船観光 (1)

ヴァヌアツは南太平洋の島嶼国である。人口は約30万人で、首都のポートヴィラと、エスピリトゥ・サント島のルガンヴィルが一般的に「都市」とされ、他の地域は「村落」「島嶼部」「地方」などと称される。ちなみに

2020 年センサスによると、都市部の人口はポートヴィラが 49,528 人、ルガンヴィルが 18,062 人である［VNSO 2021］。

これら都市部はリゾート観光地となっている。シドニーからポートヴィラまでは、直行便で 3 時間半ほどであり、実際、オーストラリアからの観光客が 5 ～ 6 割を占めている。ポートヴィラには、高級リゾートホテルから格安のゲストハウスまで数多くの宿泊施設が立ち並び、観光客は旅の予算や人数に応じて、好みの施設に宿泊することができる。

表 1 は、ヴァヌアツの観光客数の推移である。飛行機でヴァヌアツを訪れる観光客数は、2020 年のコロナ禍までおおむね 7 万人から 9 万 5 千人の間を推移してきた。他方、飛行機ではなく、クルーズ船でヴァヌアツにやってくる観光客もいる。こちらは、20 万人前後で推移しているが、滞在期間が数日と短く、また寝食を船内で賄えるため、観光客がヴァヌアツに落とす現金はそれほど多いわけではない。

いずれにせよ、観光業がヴァヌアツ経済を支える基幹産業であったのだが、先述の通り、コロナウィルス蔓延の影響を受けて、2020 年 3 月に国境をロックダウンする。下記の表 1 における 2020 年の数は、1 月～ 3 月までのものである。

筆者が主な調査地とするアネイチュム島は、ヴァヌアツ最南端の島で、人口は 950 人ほどである。島に電気やガスはなく、島民たちは、タロイモ、マニオク（キャッサバ）、ヤムイモなどのイモ類を栽培しながら、ほぼ自給自足的な生活を送っている。都市部以外のヴァヌアツの多くの村落部は、ほぼ似たような生活様式であるが、アネイチュムが他島と大きく異なるのは、この島には観光クルーズ船がやってくるという点である（写真 1）。

この観光旅行は、オーストラリアに拠点を置くＰ＆Ｏクルーズ社が企画・運営しているもので、シドニーやメルボルンなどの港を出港し、太平洋を周遊するものである。コースや日程はさまざまであるが、途中、船はフィジー、仏領ニューカレドニア、トンガなどに停泊する。アネイチュムは、彼らが立ち寄る停泊地のひとつである。正確にいうと、観光客はアネイチュム本島ではなく、その南西部に浮かぶイニェグ（*Iñec*）というサンゴ礁の小島に足を降ろす（観光客はイニェグではな

表 1　ヴァヌアツを訪れる観光客数

	飛行機	クルーズ船	合計
2012	88,085	215,836	303,921
2013	89,253	233,097	322,350
2014	86,239	220,205	306,444
2015	63,625	199,619	263,244
2016	70,988	254,489	325,477
2017	83,407	234,141	317,548
2018	91,726	244,330	336,056
2019	95,849	135,357	231,206
2020	17,166	60,401	77,567

（Vanuatu National Statistics Office の資料をもとに筆者作成）

写真 1　アネイチュム沖に停泊した観光クルーズ船

写真 2　イニェグ（ミステリーアイランド）

く、愛称の「ミステリーアイランド」と呼ぶことが多い、写真 2)。イニェグは普段は無人島であるが、飛行場が敷設されている。それゆえ、島の人は週に 1 ～ 2 度飛行機が飛んでくるときと、この観光客がやってくるときにイニェグに渡ることになる（距離で約 2 キロ、船外機付きボートで約 15 分)。

クルーズ船には 2,000 人～ 3,000 人の観光客が乗船している。彼らは未明もしくは早朝にアネイチュム沖にやってきて、半日、イニェグに滞在し、海水浴や日光浴、買い物などを楽しんだ後、夕方には別の停泊地へと向かう。イニェグでは、観光客相手のさまざまなアトラクションが用意されているが、それらは①おみやげ品などの販売、②イニェグ内でのアトラクション、③オプショナルツアーという 3 つに大別できる。

まず①は、イニェグ南側に「マーケットプレイス」と呼ばれる屋台を設置し、ここでおみやげ品の販売を行うものである。屋台は 60 ほどに区切られていて、販売希望者に 1 区画が割り当てられる。売られるものとしては、手作りの民芸品（ヤシの葉で織ったウチワや、パンダナス製のバッグ、木の実で作ったネックレスなど）の人気が高い。一方、市販のおみやげ品（VANUATU と書かれたトランプやタオル、絵葉書、T シャツ、パレオなど）をポートヴィラから仕入れて、それを売る者もいる。販売員（女性が多い）は、値段交渉などで観光客と多少の会話はするが、それほど高い英語能力が求められるわけではない。

②はイニェグ内で写真撮影をしたり、店舗型サービスを行うものである。「人喰い族」に扮した島民が観光客を襲うポーズをとり、それを写真に収める「カンニバルスープ」は大人気のアトラクションである（1 回 5 豪ドル [(2)])。また髪を細かく三つ編みにして編み込む「髪結い屋」[(3)] やマッサージ店なども数店舗あり、どこも人気を博している。また島で獲れたロブスター（20 ～ 50 豪ドル）やココナツジュース（3 豪ドル）を売る店舗もある。

写真３　オプショナルツアーを検討する観光客

③はさまざまなオプショナルツアーである。カヌーやヨット、シュノーケル用具のレンタルや、ボートに乗って沖合まで行きウミガメと触れ合うものなどがある（写真 3)。

3．緩やかな対立

この観光クルーズ船は 1983 年からアネイチュムに立ち寄るようになった。それでも当初は年に数度のことで、島の生活や経済に大きな影響を与えることはなかった。実際、筆者が島に長期滞在していた 2001 年から 2002 年の 1 年間でさえ 10 度ほどの来島であった。それが 2005 年調査では年間 20 回ほど、2006 年調査では 33 回、2011 年調査では 43 回、2013 年調査では 70 回、そして 2018 年調査では 81 回になった。夏季に入りクリスマス休暇もある 12 月～ 2 月頃が繁忙期であり、その時期には月に 10 回を超える来航がある。

島民たちは、基本的には自給自足の生活を送っているが、それでも現金がまったく不要

だというわけではない。洋服を買ったり、子どもの学費を支払ったり、米や食用油やトイレットペーパーなどの生活必需品を購入するには、どうしても多少の現金が必要となる。だが島で賃金を得ようとしても、これまで小中学校の教員しか仕事がなかった。だから家族のうちの誰かが首都に出稼ぎに出て、仕送りをするのが一般的であった。ところが、ここ数年の観光業の盛況さには目を見張るものがある。例えば、観光客が来る前日と当日に島の清掃を行うのだが、これは1日当たり1,500～2,000ヴァツの収入になる(4)。また、店舗販売は1日あたりおおよそ5～25豪ドル、マッサージ店は施術師一人当たり80豪ドル、髪結い屋は一人当たり60豪ドルほどの収入になる。

こうした現状に鑑みて、今では「ポートヴィラよりアネイチュムの方が稼げる」と口にする島民は多いし、逆に「ポートヴィラの親族に仕送りしている」という人もいるようだ。また筆者の調査では、観光船が1回来航すると約100人～150人の島民がこの観光業に従事していた。もちろん悪天候などもあり、すべての日に何千ヴァツも稼げるわけではないが、それでも多くの人が、一度に賃金労働に従事できる機会は、これまで島になかったことである。

だがこうした多忙さは、島の日常を変化させ、島民たちの間に緩やかな意見の対立を生むことにもなった。それはごく大まかにいうと、「観光業を積極的に推進したい若者」と「観光業には消極的な高齢者」という図式にまとめることができる。大きな諍いはないのだが、儀礼の場でのスピーチや、教会での説教のときに、時折、苦言が呈されることがある。

ある教会関係者は、次のように語る。

> 最近では、観光船が頻繁に来る。もちろん現金は大切なのだが、それは神の祝福があってこそである。土曜日には教会の清掃や、歌の練習などがあるが、最近はみな休みがちである。また日曜日に観光船が来るときなどは、礼拝を蔑ろにして、そちらに行く者も大勢いる。

船はクリスマスも日曜日も関係なくやってくる。礼拝への参加者が少ないことを嘆く関係者はこれまでにもいたが、観光業による多忙さは、より島民たちを教会から遠のかせているのかもしれない。

もちろん若者にも言い分はある。ある男性（30代）は次のように語る。

> お金があれば、いろいろと新しいものが買える。俺もソーラーパネルを買った。日本にも行けるかもしれない。日本とヴァヌアツの往復運賃はいくらくらいだ？（筆者が「20万ヴァツくらい」と答えると）それなら行けるかもしれないな。〇〇が新しいボートを買った。新品だ。あれはたぶん100万ヴァツくらいする。俺もボートが欲しいので、それくらい貯金したい。

実際、これまでなかったようなものが島で見られるようになった。ソーラーパネル、その電気を充電するためのバッテリー、自転車、テレビ、スマートフォン。首都から食品やガソリンを卸入れて、自分で店舗を開く者も出てきた。2000年代初頭、船外機付きのボートは、島の共同のものも含めて2～3隻だけだったが、現在では観光客用のものも含めると15隻ほどある（写真4）。

観光推進派も慎重派も、現在のアネイチュ

写真４　陸に上げられたボート
新しいものが多い（アネルゴワット村）

ム社会が観光によって大きく変化しつつあるという点では意見が一致している。そして観光業による多忙さや社会の変化は、再帰的に観光の場に現れ始めている。一例を挙げれば、おみやげ店で、既製品を売る店が多くなった。これまでは、次に観光船が来島するまで数週間から数カ月あったので、その間にアクセサリーを作ったり、バッグを編んだり、観光客に披露する歌や踊りを練習することができた。しかし今では、観光客が週に数回やってくることもある。これまでと同じペースで準備していては間に合わないのである。彼らはトランプやアクセサリー、絵葉書など既製のおみやげ品をポートヴィラの卸業者に注文し、そこに幾ばくかの利益を加えて店に陳列する。結局、首都のおみやげ店と同じような商品が並ぶことになるのだが、それでも観光客は購入していく。

また観光船が来る日は、ほぼ丸一日、本島を離れてイニェグに滞在しなければならない。早朝、観光客が下船する前に、おみやげ品などの荷物をもってイニェグに渡り、準備をする必要がある。また夕刻は、観光客がすべて引き揚げてから、自分たちの帰り支度をして、本島へと戻る。イニェグから最も近い対岸のアネルゴワット村まではボートで15分ほどであるが、そこから自分たちの集落に戻るまではさらに数十分から数時間かかる者もいる。また清掃係だと前日からイニェグに野宿することにもなる[5]。つまり観光客が来る日は、島中がちょっとしたお祭り騒ぎになるのである。普段だとタロイモ畑に行き、その日に食べる分を取ってくるのだが、それができず買った米で代用する日も多くなった。ある女性（50代）は次のように言う。

> 観光客がたくさん来るようになって忙しくなった。前は午後にゆっくりおしゃべりしていたんだけど、最近は、それもなかなかできなくなった。（筆者に）日本では、毎日、こんな生活（*numu*）をしているのかい？若い人も、年寄りも？ポートヴィラみたいに？チッチッチッ…（舌打ち）[6]、それは大変だね。私たちにはできないよ。けど、今の（アネイチュム）島の生活も楽ではないよ。

2018年の調査では、この「生きていくのは楽じゃない *Et itiyi top upni numu*」という語りを何度も耳にした。それはこれまで島の生活は楽（*top upni*）なものとして認識されていたことの裏返しであり、その参照点となっているのが、首都のポートヴィラでの生活である。前稿でも取り上げたが［Fukui 2020: 103］、ある男性は儀礼の際のスピーチで、次のように言及した。

> 今や私たちは大きな変化のなかにいる。観光客は増え続け、生活も変化している。しかし、果たしてこれでいいのだろうか。若者は畑に行かず、現金ばかりを追い求める。ここはポートヴィラではない。シドニーでもない。私たちは私たちのカストム（kastom）を大事にすべきだ。しかし今の私たちのカストムは、私たち本

来の（*atoh*）カストムではない。これは誰のカストムなのだ？

「カストム kastom」とは、ビスラマ語[7]で「伝統」を指す語である。具体的な歌や踊りや儀礼を指す場合もあるし、この場合のように、西洋人の、あるいはポートヴィラのものとは異なる「島での自分たちのライフスタイル」を指す場合もある。彼は観光業に没頭し、日々の畑仕事を疎かにする若者に向け、警句を発した。だがこの一言は、筆者にカストムの再考を迫るものでもあった。一体これは誰のカストムなのだろう？

4．ポートヴィラ化する村落？

この点に関して、前稿［Fukui 2020］では「匿名性」という観点からアネイチュム社会の変化を論じた。この「匿名性」の議論の前提になっていたのは、吉岡がメラネシア社会の特徴として論じた「バイカルチュラル」という概念である。先述の通り「カストム」は主に「スクール skul」という対概念のもとで用いられる。これは英語の school に由来するもので、西洋人がもたらした制度やモノややり方を指す。ヴァヌアツでいえば首都のポートヴィラがスクールの中心地であり、そこには資本主義経済のもと、多くの人々が賃金労働に従事している。

それとは対照的に、村落はカストムの場として位置付けられる。たしかに要素だけみればスクールの範疇のものも多く存在する。人々はTシャツを着て生活しているし、日々の生活には現金も必要である。だが、重要なのは個々の要素ではなく、全体としての場である。例えば、儀礼の場でTシャツを着る姿を指して「カストムとスクールは混ざり合っている」という融合論もみられたが、吉岡は、個々の要素に還元するのではなく、場に対する人々の認識が重要なのだと説いた。つまり人々の認識のなかで、カストムとスクールは決して混ざり合うことはなく別個のものとして併存しており、たとえTシャツなどスクールの要素があったとしても、儀礼そのものはカストムだと認識されている。他方、村落生活のなかにも、学校や教会や選挙といった制度があり、これらが村落におけるスクールの代表例である。こうしたカストムとスクールの併存状況を指して、吉岡は「バイカルチュラル」と呼んだのである［吉岡 2005］。

さて、アネイチュムに話を戻そう。吉岡は筆者の前稿に対し、次のように批判している。

> 福井は、アネイチュム島でここ 20 年の間に生じた変化を取り上げ、筆者（吉岡）が 20 年前に論じたカストムとスクールが併存するバイカルチュラルな状況はもはや存在しないと論じている。そして福井は、筆者がかつて批判したリンドストロームやホワイトが展開した「文化的混淆」の議論を再評価し、観光産業が活性化し貨幣経済の流入が顕著な現在のアネイチュムでは、スクールの要素とカストムの要素が混ざって「文化的混淆」の状態になっていると主張している。確かに、ここ最近の 20 年間における西洋近代の浸透度は高くかつ急速で、その結果、大きな変化がヴァヌアツを襲っている。したがって 20 年前に見出すことができたカストムとスクールの併存状態は、今は崩れてしまっていると言うことはできる。ただし、筆者は、福井のように「文化的混淆」が生まれていると捉えるよりもむしろ、スクールがカストムを侵食し

てカストムが消滅しつつある状態と捉えるほうがいいように思う。［吉岡 2020: 22］

まず先に断っておかなくてはならないのは、筆者自身は「カストムとスクールが併存するバイカルチュラルな状況はもはや存在しない」と想定しているわけではないし、「リンドストロームやホワイトが展開した「文化的混淆」の議論を再評価」しているわけでもない。前稿も基本的には、吉岡の「バイカルチュラル」の枠組みを首肯しつつ、そのなかでアネイチュムの社会変化を論じている。またリンドストロームやホワイトの主張する「混淆論」というのは――先の「T シャツを着用した儀礼」というのがまさにその最たる例であるが――、カストムは手つかずのまま連綿と継承されたのではなく、西洋的な要素も内包しつつカストムとして存続しているという議論である。アネイチュムの場合、そうした事例が新たに生まれたわけでもない。

筆者が主張したかったのは、まさにカストムが消滅しつつある「場」の問題である。たしかにアネイチュムは、吉岡の調査する北部ラガ（ペンテコスト島）よりもカストムが弱い島である。しかしそれでも、人々にとって村落は自分たちのカストムの「本拠地」であり、それはスクールの統べるポートヴィラとはまったく異なる場所であった。しかし、ここ数年の激変は、これまでにはなかったものであり、だからこそ、先の島民男性は「これは誰のカストムなのだ？」と問うたのだ。筆者はそれを「匿名性」――つまり誰のものか、島民たちにもよくわからないもの――と分析したのだが、吉岡はこの変化を「アネイチュムのポートヴィラ化」だという。もう少し彼の批判を引用してみよう。

しかし、福井の言うような「文化的混淆」であると言うよりもむしろ、筆者には、アネイチュムのポートヴィラ化の兆候であり、カストムとスクールの併存状態からカストムが極端に衰退しつつある状況と捉えるほうが実情にあっていると思える。…福井はこの（島民たちの）言説を、「島の生活はまだスクールではないがもはやカストムでもない」ので文化混淆の状態だと言いたいようであるが、「本当のカストムではない」、あるいは「間違ったカストム」という視点は、20 年以上前のバイカルチュラルな状況が顕在していた北部ラガでも見出せたことであり、これを文化的混淆の証とするのはちょっと難しいと思われる。［吉岡 2020: 23］

この「ポートヴィラ化」という表現に関しては、正しい部分と慎重に検討した方がよい部分があると筆者は考える。先に後者を説明しよう。その重要なポイントが土地である。ポートヴィラには村落から移り住む人も大勢いるが、ヴァヌアツの土地は売買できないので、都市住民も基本的にはリースされた土地に暮らしている。ゆえに、たとえ都市で生まれ育った者であっても、そのアイデンティティは村落にあり、親の紐帯を辿りつつ「私は○○島民である」と自称する。そして島の親族とのネットワークを維持し、土地権などを保持しつづけて、いつでも島に帰れるようにしておく。つまり都市住民にとってのポートヴィラとは、どこか「仮住まい」の場所なのである。逆に言えば、都市住民には、「島に帰ればカストムの生活がある」という「保険」がある。こうした特徴を踏まえて、メラネシアの都市を「ゲマインシャフト都市」と

名付けたのは吉岡自身である［吉岡 2016］。

他方、アネイチュムは彼らの「本拠地」そのものである。そこには親族集団の保有する土地があり、近親が暮らし、自給自足的な生業がある。彼らのアイデンティティの源泉でもある。島民にしてみれば、この「私たちの本拠地」を支えているのが「私たちのカストム」であるはずなのに、それが今、霧消しようとしている。ポートヴィラならば、カストムが衰退しても問題はない。そこは自分たちの土地ではないからだ。だがアネイチュムは違う。現在の生活は「誰」に属するものなのかという先の男性の問いは、この「カストムの本拠地なのにカストムがない」という、他のどの地域にもみられない現象を受けての、島民たちの困惑を凝縮したものである。植民地時代も含めその誕生当初からスクールの場所であったポートヴィラと、カストムの本拠地である村落部では、「カストムが衰退する」ということの意味合いが異なる。その部分を考慮せずに「ポートヴィラ化」と結論づけるのは早計かもしれない。

他方、「ポートヴィラ化」とでも呼ぶべき側面もたしかに存在する。次章で検討するが、島民のなかには「都市になればよい」と考える者もいるし、島の変化を歓迎する声も確実にあるのだ。この点に関して吉岡は、村の生活――つまりカストム――の特徴は「変化しない」ことだと主張する。「人々は「もとからあった」という点に固執し、「変化する」ことを常に否定的に捉える。筆者（吉岡）は、北部ラガを訪れるたびに「前と変わったか？」という質問を受けるが、彼らは「変わらない」という返事を期待しており、「以前のままだ」と応えると人々は納得するのである」［吉岡 2005: 215-216］。

たしかにアネイチュム島民にとってのカストムも「変化してはいけないもの」である。そこには歌や踊り、自分たちの歴史、土地保有制度、それに関連した名付けの実践などが含まれる。だがもはや社会全体は不可避に変化している。ここで留意すべきなのは、この「変化」は「現金を稼いで、モノが溢れ、生活がより豊かになっていく」という物語によって支えられているということだ。換言すれば、発展、成長、進歩という考え方であり、これをビスラマ語で「デヴェロップメン developmen」という。これまでにもアネイチュムは西洋の影響により何度となく変化を繰り返してきた。疫病による人口減少、キリスト教の到来、英仏による植民地化、そして国家としての独立など。しかしそれらは、大きな波に飲み込まれ、巻き込まれるかたちの「変化」――ビスラマ語の「チェニス jenis」――であった。もちろん観光業も当初はそうだったのかもしれない。ただ現在では、島には観光業に由来する多くの変化がみられ、島民の生活を根本から変え続けている。そしてそれは、ある部分までは彼ら自身の意思によって積極的に持ち込まれ、すでに生活（*numu*）のなかに実装されているのである。好意的に捉える者にとって、この変化は単なるチェニスではなく、デヴェロップメンである。彼らは、北部ラガの住民のように「変化しないこと」を自慢するのではなく、新しい電化製品やボートを競うように購入し、観光業の発展を嬉々として語るのである。

筆者が前稿でアネイチュムの現状を指して「スクールでもないがカストムでもない」と述べたのにはこうした理由がある。次章ではアネイチュムに関連する新聞記事を扱う。そうすることで島民たちが考えるデヴェロップメンの思想と実践が、より明確になるだろう。

5．待望されたデヴェロップメン

5-1　コロナ禍以前

『Daily Post』紙は、ヴァヌアツで広く購読されている新聞であり、現在、インターネット版も出ている。本稿ではこのインターネット版を用いて、アネイチュム島に関する記事を検索した。2017 年～ 2021 年末までの 5 年間について、「Aneityum」の語で検索すると、220 件がヒットした。このうち関連性の薄いものを除外すると、アネイチュム島が舞台となっている記事、あるいはアネイチュム島民が登場する記事が 55 件あった（表 2）。

コロナ禍以前は、ほぼ観光業に関する記事

表 2　Daily Post 紙、アネイチュム関連記事一覧（2017 ～ 2021）

記事	掲載年月日	記事タイトル	主要テーマ
1	2017/2/3	ミステリーアイランド、オペーション・オブ・ザ・シー号を歓迎	観光
2	2017/2/4	アネイチュムのチーフ、飛行場の本島移転を要望	飛行場移転の要望
3	2017/2/7	アネイチュム島民の豊かな生活	観光
4	2017/2/11	ミステリーアイランドの積極的なマーケティングが不可欠	観光
5	2017/2/20	アネイチュムの地元産品	観光
6	2017/2/24	アネイチュムからのレッスン	観光
7	2017/4/18	観光客、アネイチュムの小学校に文房具を寄付	観光
8	2017/7/7	最先端の自動気象観測所	新たな気象観測所
9	20177/8	眠りにつける気象観測員	新たな気象観測所
10	2017/7/28	ミステリーアイランドの水問題	観光
11	2017/8/2	ミステリーアイランドがアジア・太平洋の観光地ベスト 5 に選出	観光
12	2017/8/24	手工芸品の島嶼間貿易	観光
13	2017/9/19	ミステリーアイランドのアウトレット、地元産のみの販売へ	観光
14	2017/10/11	アネイチュムの若者、145,000 ヴァツをアンバエ島に寄付	アンバエ島火山避難者に対する寄付
15	2018/2/10	アネイチュムに帰ってきた牛たち	牛の飼育
16	2018/2/24	警察当局、アネイチュム島民に冷静になるよう要請	観光
17	2018/3/22	フランス大使、アネイチュムを訪問	仏大使訪問
18	2018/12/6	津波	地震と津波
19	2018/12/7	国家災害管理局、津波被害把握のためチームを派遣	地震と津波
20	2018/12/8	ミステリーアイランドの再建、はじまる	観光
21	2019/1/9	アネイチュム・ウメチコミュニティに VIP トイレ 43 個とコンポストトイレ 2 個を設置	トイレの新たな設置
22	2019/3/18	世界 4 位の巨大クルーズ船、来週、就航	観光
23	2019/3/20	ストレットプライス：まっすぐを保つ	首都の店舗、アネイチュムへの出店計画
24	2019/3/26	ロイヤル・カリビアン・クルーズ社、ヴァヌアツへのさらなる貢献を明言	観光
25	2019/6/12	仏海軍船、上陸できず	仏海軍船上陸拒否問題
26	2019/6/13	フランス海軍の艦船上陸拒否に関する外務省の公式回答	仏海軍船上陸拒否問題
27	2019/6/13	政府は仏海軍船の妨害をすべきでない	仏海軍船上陸拒否問題
28	2019/6/20	アネイチュムチーフ評議会、学校支援がいつ来るのかを問う	仏海軍船上陸拒否問題
29	2019/10/1	アネイチュムの森林リース期間が満了	森林地のリース期間終了
30	2019/11/19	ヴァヌアツ国立銀行の豪ドル口座サービス開始にアネイチュム島民歓迎	観光
31	2019/11/22	アネイチュム南北縦断道路の建設	南北縦断道路の建設
32	2019/11/28	アネイチュム家畜担当者、独占インタビュー	牛の飼育と道路建設
33	2020/2/14	テルーチャ中学校移設契約、締結	テルーチャ中学校移転
34	2020/3/23	アネイチュム、一時的ロックダウン	コロナウィルス関連
35	2020/3/24	アネイチュムへ寄港しないよう船舶へ指示	コロナウィルス関連
36	2020/3/25	クルーズ船の停泊を許可したのは誰か？	コロナウィルス関連
37	2020/3/26	タフェア州から帰港した船舶のコロナウィルスへの懸念	コロナウィルス関連
38	2020/3/26	乗客、呼吸器疾患の兆候を見せず：ジョン・トナー氏の反論	コロナウィルス関連
39	2020/3/27	アネイチュム島民、島の評判に懸念の声	コロナウィルス関連
40	2020/3/28	警察官、隔離期間を終了	コロナウィルス関連
41	2020/3/28	アネイチュムの濃厚接触者の検体、陰性	コロナウィルス関連
42	2020/8/20	観光業停止後も、アネイチュムにはよい時代	観光
43	2020/9/3	アネイチュム若手農家、バニラ生産への投資	バニラ
44	2020/9/12	ヨッシュ・シン：音楽への旅	アネイチュム出身の歌手のインタビュー
45	2020/10/1	経済活性化のためには、全分野での協同組合が必要：コアナポ大臣談話	協同組合
46	2020/11/21	テルーチャ中学校建設、着工	テルーチャ中学校移転
47	2021/3/6	アネイチュムのチーフ、津波用サイレンの設置を求める	津波用サイレン
48	2021/5/27	アネイチュム、果物・野菜農家研修会	果物・野菜農家研修会
49	2021/6/26	アネイチュム島民とチーフ、ワクチン接種の準備へ	コロナウィルス関連
50	2021/8/5	アネイチュム農家、最高級バニラの安定的な生産へ	バニラ
51	2021/9/4	「漁は手早く稼ぐ方法」とアネイチュム漁師	アネイチュムの漁師インタビュー
52	2021/9/11	アネイチュムの元露店主たちの「プラン B」	ピャクダン栽培
53	2021/10/8	アネイチュムでスポーツ複合施設竣工式	スポーツ複合施設竣工式
54	2021/11/20	アネイチュムのバニラ農家からの直接購入	バニラ
55	202111/23	アネイチュムのバニラ農家、市場アクセスの実現	バニラ

が並ぶ[8]。現在、アネイチュムでは「ミステリーアイランド・ツーリズム・ホールディングス（MITHL)」という組織を作り、観光業に関する全業務の管理運営を行っている。その中心人物は40代～50代の男性である。記事1は、5,000人収容の超大型クルーズ船「Ovation of the Seas号」の就航に際して、ナタマン貿易観光大臣（兼副首相)、ピキオウネ財務大臣をはじめとする政府代表団のアネイチュム訪問を伝える記事である。記事には、大臣たちの談話に加え、MITHLのノランメレイCEOから政府への要求が掲載されている。それは①本島アネルゴワット村の橋の建設、②アネルゴワット村への物質的な支援計画、③アネルゴワット村に観光客を宿泊させるための道路整備、④他島からの生産物の鮮度保持のための電力供給、⑤外国人観光客が要求する衛生基準を持続的に満たす、本島からミステリーアイランドまでの水供給、⑥今後のアネイチュムの観光業が発展するための支援について、島民と政府が共に対話を進めることである。

④⑤などは、現在の観光業なかで実際に直面している課題に対して解決策を求めるものであり、緊急性の高い要望であるといえる。他方、①②③は興味深い。現在、観光客はイニェグのみに上陸し、本島への渡航はほとんどみられない。それは自分たちの生活域にまで観光客が足を踏み入れることを快く思わない島民もおり、これまでにも何度か問題になったことがあるからだ［福井 2006: 12]。ゆえに、本島の観光開発は、あまり積極的なものとは考えにくい。ならば、それほど観光業そのものに関係のない①②③は、中心村落であるアネルゴワット村の発展や開発を求めたものであるといえるだろう。

記事3は、観光業によって、島民たちが豊かな生活を送っていることを伝える記事である。ポートヴィラに住む女性が、アネイチュムの兄にスマートフォンをねだるエピソードに始まり、いかに島民たちが現金を稼いでいるのかが記されている。最後はヴァヌアツ国立銀行の担当者の談話として、以下のような文章で締められている。「(その担当者は)ポートヴィラとルガンヴィル以外で最も貯蓄がある人はアネイチュムにいる可能性が高いと確信している。彼は、島民のなかには6桁（10万ヴァツ）以上の貯蓄がある者もいるのだと言う」[9]。

これに関連して記事30は、島に豪ドル立ての口座が開設され、島民が歓迎するという記事である。観光客は豪ドルで支払うことが多く、これまで島民たちは各々、首都へ出た際などに換金・両替をしていた。今回、島でそのまま豪ドルを入金することができることで、その手間が省けるのである。

記事4は、ビジネスコンサルタントのインタビュー記事である。彼は、カリブ海観光と比較して、アネイチュムの観光が今後より発展するには独自のウェブサイトを作り、MITHLが主導権を握りつつ、クルーズ船以外の観光客も取り込む工夫が必要なのだと提言する。実際、彼は過去にポートヴィラの旅行会社とMITHLの提携を実現させている。彼はこのように統計データを用い、ウェブサイトを活用し、うまくマーケティングをすれば「この地域に多くの現金や収益を生むことができるだろう」と述べる。

こうした観光業に関する記事に加え、島の開発に言及する記事も散見できる。「ヴァヌアツ南部アネイチュムの人たちは、自分たちの島に新しい道路ができることを40年近く心待ちにしていた」という書き出しで始まる記事31は、島の南北縦断道路建設について

述べたものである。「現在、アネイチュム島の北部および北東部に住む人たちは、クルーズ船が来た際、商品を運ぶのに苦労している。というのも、彼らの唯一のアクセス手段はボートであり、ボートでの輸送は非常に高価になるのだが、彼らに選択の余地はない」。これも事実であり、島の北部住民からはたびたび不満が漏れていた。ただこの記事が興味深いのは、開発全般に対する島民の反応が書かれている点だ。

> この島がユニークなのは、政府による開発がいつも問題なく歓迎されるということだ。道路整備が行われている間、ビャクダンの木が道路脇に積み上げられていくのを本紙記者は目撃したが、このことについてどこからもクレイムが出ないのだ。「ヴァヌアツの他島と比べて、この島では土地争いがなく、私たちは開発を望んでいるだけなのです。だから掘削機やブルドーザーが木をなぎ倒すのを目にすることができるのです。長い間、それは私たちの悲願だったから、誰も止めに来ないし、そこは自分たちの土地なのだと主張もしません。整地作業もほとんど終了しました」と（道路工事責任者の島民は）指摘する。また、海面上昇による海岸浸食のため、政府はアネルゴワット村の中学校移転を確約している。加えて、通信会社との共同事業で、島北部に電波塔の設置も決定している。新ルートができることで、沿岸部に住む人たちは、すべての道路が開通後に転居することを計画しており、また公共車の購入も検討している。

記事 32 は、島の食肉牛の増加に関するインタビュー記事である。島の畜産担当者は、この縦断道路が開通するとバイクでの島内移動が容易になり、畜産農家の支援も捗ると期待している。この記事で重要なのは、最後に彼の想像する島の未来について書かれている点だ。つまり、観光客や NGO、政府関係者などが頻繁にアネイチュムを訪れることに加えて、「ミステリーアイランドを通してアネルゴワット村の商業開発が進むと、この村のすべてではないにしても、その一部が都市の中心地 (urban centre) になる時が来ると（この担当者は）確信している」。

5-2　コロナ禍以降

2020 年になるとアネイチュムにもコロナ禍が降りかかる。3 月 11 日にアネイチュムを訪れていた「Voyager of the Seas 号」の乗客が、シドニーに帰港後、コロナウィルスに感染していることが判明したのである。同紙は連日、この件を報道する（記事 34 ～ 41）。すぐに島はロックダウンされ、空路および海路での往来が一時的に禁止された（記事 34）。その後、濃厚接触の疑いのある島民 6 名分の検体がニューカレドニアに送られたが、すべてが陰性で事なきを得た（記事 41）。

それ以降、現在まで観光業は再開されていない。では、同紙上におけるアネイチュムの記事はどう変化したのだろうか。この騒動の後、最初の記事は 5 ヵ月後の 2020 年 8 月 20 日付の記事 42 である。「観光業停止後も、アネイチュムにはよい時代」というタイトルの記事は、以下のように始まる。

> ヴァヌアツ南部のアネイチュム島は、現在世界的に流行している COVID-19 の影響で、今はクルーズ船観光客を受け入

れていない。だが一見すると暗い未来にもかかわらず、島民には新しい地平が開かれつつある。ヴァヌアツ観光の目玉のひとつであるミステリーアイランドに焦点を当てた後、島民たちは現在、アネイチュム本島の開発を加速させることに注力しているようである。コミュニティの老人と若者が協力してリーダーシップを発揮するなか、人々は小さなコンクリート橋の建設にあたっている。これによりアネルゴワット小学校に通う子どもたちは小川を安全に渡ることができるし、地域の人々も病院や銀行に行くために使うことができる。

また記事には、近年、開発によってこの島にもたらされたものが列挙されている。つまり、先述した南北縦断道路の建設、テルーチャ中学校の移転、パシフィック・ペトロリアム社によるガソリンスタンドの設置などである。記事の趣旨をなぞるならば、こうした新たな施設や設備ができることが、島民にとっての「よい時代」であり「新しい地平」なのである。

新しい施設に関していうと、記事53も興味深い。アネルゴワット村に新たに建設される多目的スポーツ複合施設のため、コアナポ財務大臣も出席して竣工式が執り行われたという記事である。この施設はバレーボール、バスケットボール、フットサルなどができる多目的施設と、サッカーなどの競技場、そしてランニングトラックを整備したもので、2022年2月に完成予定である。担当者である島民はインタビューのなかで、「この開発は島にとってエキサイティングなニュースであり、島民みんながこの達成を喜んでいます」と述べている。

またコロナ後の記事のなかで顕著なのが、ロックダウン後、島民たちが観光業以外でどのように収入を得ているのかという記事である。例えば、記事52はビャクダンの栽培・加工・販売を行う「プランB」について報じている。そのなかでアネイチュムチーフ評議会の代表は次のように語っている。「今回のロックダウンは、私たち島民に何の影響も与えていません。それどころか、最初の40トンのビャクダンを伐採し、その木から5～600万ヴァツを稼ぐというプランBを実現することで、回復力を高める原動力になっています」。

同様に、バニラ栽培に関する記事が4本ある（記事43、50、54、55）。記事によると、これまでにもアネイチュム（とくに北部のポートパトリック村周辺）では2000年代初頭にバニラ栽培が行われたのだが、市場価格の下落により、多くの農家が一度はバニラ栽培を諦めた。だが、ここ数年、バニラの価格が再び上昇しはじめたのだ。記事43では、ポートパトリックで農業・農村開発省などが主催する研修会が開かれ、30を超えるバニラ農家が参加したことが記されている。またこの研修会の担当者でもある、スパイスコンサルタントの男性は次のように語る。「コロナ禍のなか、多くの農家が他の収入の選択肢があった方がよいということに気づきました。農業への投資、とくにバニラ栽培は、観光に頼らない選択肢のひとつです。現在、多くの農家がバニラ生産への投資に関心を寄せています」。

また彼は、「1日8時間、週に5日間働く覚悟がないと農業のレベルが上がらない」と農家たちを鼓舞する一方で、タンナ島の若いバニラ農家が100万ヴァツを稼いだという話をして、アネイチュムのバニラ農家の関心

を引きつける。アネイチュムの担当者は「バニラ生産への投資に関心のある多くの若い農家にとって、この研修会は目から鱗の落ちる体験です」と語る。

記事 50 はその続報であり、過去 30 軒だったバニラ農家が 60 軒にまで増えたこと、そのうち一級品を産出する本格的なバニラ農家が 27 軒もあることなどが記されている。記事 54、55 は、2021 年の収穫期を迎え、ポートヴィラとサント島からバイヤー 2 人が来島し、乾燥バニラビーンズの直接買い付けを行ったことを報じる記事である。ここでも「コロナのパンデミックで観光業が停止した後、アネイチュム島ポートパトリック村の農家は、収入と生活を支えるために、農業――とくにバニラの栽培――に目を向けています」と記され、バニラへの投資が、コロナ後の現金収入の手段であることが強調されている。バイヤーは 20 軒近い農家から 59 キロの乾燥バニラビーンズすべてを買い取り、売り上げは 80 万ヴァツ以上に達した。島の担当者は「観光業での収入が見込めなくなって、今や、バニラ栽培が自分たちの最重要の収入源となっている」と述べている。

5-3　デヴェロップメンとビッグマン

以上、新聞記事を小括してみよう。アネイチュムが記事になるのは、コロナ禍以前は、ほぼ観光業に関することである。とくに、島民たちがいかに儲けているのかという内容は、何度も記事になっている。またコロナ禍以降は、観光業が停止した後、彼らがどのように現金を稼いでいるのか、そして島がどのように開発されているのかという記事が目立つ。もちろん新聞記事になるような出来事のみを抽出しているので、それがアネイチュム社会の一面に過ぎないことは常に念頭に置かなくてはならない。それでも、これらの記事に登場する人物たちの発言を端的に要約するならば、「島民は現金を稼いだ方がよい、島は新たに開発された方がよい」ということになる。そして先述のとおり、この「現金を稼ぎ、島が開発され、より豊かな生活がやってくる」という直線的上昇志向の考え方こそ、デヴェロップメンの思想であり、それを是とする島民が一定数存在するのである。

筆者はこうした観光業に関連する一連の社会変化を追っていたのだが、2018 年に調査した際、ひとつ興味深いことに気づいた。それは若者のなかに「多額の現金を得た者は有力者になれる」と考える者が複数いたことである。この「有力者」をアネイチュム語で「ナティミ・アルパス *natimi alpas*」という。「ナティミ」が「人」、「アルパス」が「大きい」を意味するので、直訳すると「大きな人」であり、ビスラマ語でいうところの「ビッグマン bigman」に相当する（ゆえに以下では人類学用語でもある「ビッグマン」と記載する）。

上記 3 章では、ボートを買った者を羨む男性のインタビューを載せた。これには続きがある。

> ○○（彼より先にボートを買った男性）は、ビッグマンになった。△△（別の男性）もだ。俺もお金を稼いで、ボートを買って、日本に行ったらビッグマンになるな。よし、ビジネスを始めよう。ははは。冗談だよ。

最後のところは照れ隠しなのか、少し自嘲気味になる。「日本に行ったら…」というのは、この会話の前半に「日本に行けるかもしれない」という会話が筆者との間でなされたのと（3 章参照）、日本人がビジネスに長けていて、

そこで学んでヴァヌアツに帰ってくれば、また一儲けできるという自己投資の意味が込められている。いずれにせよ、この男性のなかでは、貯金をしてボートを買うとビッグマンになれるという図式ができている。

この「金持ち＝ビッグマン」の話をした際に、必ず出てくるのが、アネイチュム在住でビジネスを成功させ、誰もが「ビッグマン」と認めるＸ氏（80代）である。若いときに島を離れていたため、カストムに関することは疎いとされるが、高い学歴をもち、かつては中央銀行の総裁を務め、その後は地方議会の事務官としても働いた。また現在でも教会の有力者であり、店舗を経営し、ヴァヌアツ有数の「ミリオネア」としてたびたび新聞にも登場する。別の男性（30代）は、稼いだお金でビジネスを始めたいと言うのだが、常にＸのことが念頭にあるようだ。

> 俺はボートはいらない。その代わり、子どもを学校に行かせるのと、あとビジネスをしたい。Ｘみたいに店舗経営もいいけど、観光客におみやげを売ったり、レストランをはじめたい。今は、イニェグで飲み物しか提供していないだろ？[(10)]観光客もお腹を空かせる。島で獲れた魚をグリルして売るんだ。Ｘもそこまでは思いついていない。

「金持ち＝ビッグマン」の先にはＸの存在があり、島民にとって彼がひとつのロールモデルとなっていることは間違いない。もちろん「Ｘのようになりたい」と思う者はそれほどいないのかもしれない。だが「金持ち＝ビッグマン」になると、違う人生があり、今の自分とは違う新しい「誰か」になれるという期待を彼らはもっている。

また観光業で女性も多くの現金を稼げるようになった。ある女性（20代）は、その日、マッサージ店で働いて、多くの現金（約90豪ドル）を手にしていた。

> 今日はたくさん稼いだ。みんなにはナイショよ。いっぱい稼いで日本に行くんだ。日本にはいい男がいっぱいいるから。ここはダメ。島の男はダメ。日本の男と結婚するの。

日本のことに関していえば、もちろん冗談である。筆者へのリップサービスもある。そして「ビッグマン」というのは政治的な有力者であり、女性政治家などを除き、普通の女性にはあまり用いられない。また女性自身が「ビッグマンになりたい」と口にすることもほとんどない。しかし、今の生活には若干の不満があり、現金を手にすることで、自分の人生を彩りあるものに変えられるかもしれないという期待を彼女は抱いている。

デヴェロップメンの思想や実践は不可避的に社会を変える。観光客は増え、新しい道路が開通し、生活は豊かになる。だが変化するのは社会だけでなく、人の人生観も変えてしまうのではないだろうか。人も成長し、進歩する。今の私とは違う何者かになれるかもしれないという自己変革の力も、デヴェロップメンの思想は内包している。

デヴェロップメンは、非常に近代的な思考である。現金を稼げば、何か別の未来が待っているという考え方は、私たちにしてみれば、それほど奇異なものには映らない。実際、島民の一部――とくに観光業に積極的な若者――にも違和感なく受け入れられている。だがこれは現在のアネイチュム社会の一面に過ぎない。次章では、もうひとつの位相から、

この状況を論じてみたい。

6．否定されるデヴェロップメン

6-1　ビッグマンの資質

では、こうしたデヴェロップメンに支えられた島の現状を、観光業に消極的な人々（主に高齢者）はどう捉えているのだろうか。最大公約数的に述べるならば、「現在の生活では現金も必要であるし、観光業の発展はある程度仕方がない」という消極的容認である［福井 2017］。つまり新たに道路が走り、電化製品が増えて便利になることはある程度喜ばしいことだが、他方で島のカストムが衰退することには反対で、そこは「痛し痒し」というのが彼らの本音だろう。

ただ、彼らが常に懸念し、小言を漏らすことがある。それは、現金を追求すること、ひいては西洋的な思想やライフスタイルを追求することは、個人主義的な振る舞いにつながり、親族やコミュニティの紐帯を弱体化させるのではないかということである。

先の女性の語りにもあるように、島民たちはしばしば稼いだ現金を隠す。そこにはアネイチュム語の「アクロウ *akro*」という考え方がある［福井 2017: 203-207］。アクロウは「分配、共有」を意味する動詞である。つまり、ひとつのものをみんなで分けるという意味において相互扶助を支える考え方である。彼らはこのアクロウの考え方や実践を美徳とし、自分たちのカストムの中心に据える。そしてそれを西洋的な個人主義に対置させる。他のオセアニア地域でも広くみられることであるが、彼らにとって吝嗇やケチは、非難されるべきことである。だがアクロウは、懇願されると断り切れない義務にもなりうる。もちろん彼らも、稼いだ現金を喜んで他人に渡しているわけではない。もし稼いだ額を漏らしてしまうと、誰かに請われたときにアクロウせざるを得ない。そこで手に入れた現金に関しては、あまり多くを語らなかったり、ごまかしたり、隠す者が出るのである。そしてこれが高齢者には「自分勝手」「個人主義」と映る。ある男性（70 代）は次のように語る。

> ○○（若い男性）はいつもイニェグで稼いでいた。みんな知ってる。けど本人は「自分は稼いでいない」と言うんだ。で、ボートを買った。「稼いでいない」と言っていたのにボートを買ったんだ。信じられるか？彼の兄は、知らなかった（ボート購入の件を相談されてなかった）らしいぞ。

また別の教会関係者（70 代）は寄付金に関して愚痴をこぼす。

> （教会の寄付金をお願いするのだけど）みんなあまり出そうとしない。「私は稼いでいない」と言い訳ばかりして…。本当はいっぱい現金をもっているはずなのに、教会には出さないんだ。みんな自分のことばかり考える。自分勝手（*inmeteng*）だ。（筆者が「*inmeteng*」の意味が分からないと）あー…「セルフィッシュ」だ。セルフィッシュ。よくない。これはよくない。

では島民みながビッグマンと認めるXはどうなのだろうか。筆者はかつてXについて集中的に論じたことがある［福井 2008］。また 2018 年の調査時には、彼の体調が悪く、その件を通じて、他の者とXについての話をする機会が多かった。そこで語られるXは、

常に家族のこと、コミュニティのことを考えているという、まさに「ビッグマン」を体現したような印象を与えた。つまり子どもたちに高い教育を与え、近親の子どもたち――とくに非嫡出子 *inhalav a nefalañ*――を養子として迎え入れ、何か祝宴があるとコミュニティに牛や豚を提供した。これは先のアクロウにも通ずる振る舞いである。彼は高い教育を受け、海外経験も豊富で、また仕事柄アネイチュムを離れて暮らす期間も長かった。だから島民たちのもつXのイメージは「カストムに精通している長老」像ではなく、スクールの世界で生きてきた人物である。だが彼は常に分け与える人でもあった。つまり彼がビッグマンとして威信を集めているのは、カストムの中心価値であるアクロウをきちんと実践しているからである。

他にもアネイチュムには「ビッグマン」と称される人物が数人いる。彼らは、何か催しがあると責任者に推薦されたり、人前でスピーチをしたり、島で問題が起きたときに解決策を講じる会議（*intasalep*）で調停人になったりする。あるいは国政選挙があると出馬を要請されるような人物もいる。彼らのなかにはXのようにスクールの世界で生きてきた者もいれば、ずっと島にいてカストムに詳しい者もいる。しかし概していえば、Xのようにビジネスで成功したとか、大金持ちというわけではなく、ごく普通に暮らす島民である。彼らがビッグマンとして威信を集めるのは、自分や身内だけでなく、島全体の利益を考えているという点が大きい。

政治的有力者に関していえば、アネイチュムにはチーフ（*natimarid*）という役職があり、これは男系的に継承される。しかしアネルゴワット村では、前チーフであるナウリタが2000年に死去して以降、このポストは長らく空席だった。というのも、ナウリタには子どもも兄弟もおらず、さらに彼自身もその前のチーフの養子であった。そこで島民たちはナウリタやその前のチーフの家系を洗い出し、彼らに近い「血 *inja*」をもつ人物数名を候補者として選んだ。その際、島民たちが選考基準として挙げたのが「周囲から信頼され、集団を統率できる能力をもつ者」という点であった。つまり、（もちろん「血」が優先されるにせよ）チーフの役職であっても、その個人的な資質が常に問われるのである[(11)]。またキリスト教化以前の逸話として、選出されたチーフが、能力不足のために解任されたという話もある。いずれにせよ、彼らの考える政治的有力者の資質とは、周囲のことを考えアクロウできることなのである。

こうした点を踏まえると、若者の一部が抱いている「金持ち＝ビッグマン」という図式は、高齢者たちにしてみれば、到底、看過できないものである。若者たちは現金を稼ぎ、それを蓄財し、自分のことのみに使用する。その振る舞いはアクロウの対極にあり、ビッグマンの条件からは程遠いものに映る。たしかに、島民ならば誰しもが、社会のなかで認められる人間になりたいだろうし、ある程度の名声を求めることも理にかなっている。ただ、そのために行うべきことは、蓄財することでも、ボートを購入することでもない。

現金を得るという目的のために、観光客相手に労働することは、合理的な手段である。その点については若者も高齢者も認めている。ただ、デヴェロップメンの考え方が染みついた一部の若者にとって、現金を手に入れることは、そのままビッグマンになるという目的のための手段に転化する。老人たちには、この部分が解せない。むしろ「合理的な目的のための非合理的な手段」と映るのだ。これ

はまさにリンドストロームの定義するカーゴカルトそのものではないか。

6-2　彼らの「誤った理路」

本論の冒頭においてカーゴカルトの議論を概観したが、カーゴカルトは、その研究の最初期から、富の不平等が要因だと考えられてきた。例えばメアは次のように述べる。「カーゴカルトの原動力は、物質的水準が非常に高いヨーロッパ人に対する絶望的な羨望の感情である」[Mair 1948: 67]。またシルヴァーマンは、パプアニューギニア・セピック川流域の事例を報告している。この村には、最近まで観光船による「カンニバルツアー」が行われていたのだが、財政難で観光船が来なくなると、カーゴカルト的思想が出始めたというのである[Silverman 2012]。彼はこれを、現金にアクセスできないがゆえの人々の反応だと考えているようだ。また大量の現金を生む観光業そのものを「カーゴカルト」に見立てて分析する論者もいる［Tabani 2017]。

実際、今ではメラネシアの人が「カーゴカルト kago kalt」もしくは「カーゴカルチャー kago kalja」という言葉を用いることもあるという[(12)]［Sullivan 2005, Tabani 2013]。それは資本主義や消費社会を盲従する同じメラネシア人を批判し、侮蔑する際に発せられる。こうしたことから考えると、人々の目的は現金や富――つまりは「カーゴ」――であり、それを過度に追及することが「カルト」だということだ。ただそれは本稿の趣旨とは少し異なる。アネイチュムの人たちは、容易に現金を手に入れたのだ。

この点に関して、1950年代にカーゴカルトを文化論的に読み解いたバリッジの議論は興味深い［Burridge 1954, 1960]。彼が調査したのは、ニューギニア・北部マダン地区に暮らすタングー社会である。ここで1930年代後半よりマンブーカルトが起こっていた。マンブーとは、この運動を最初期に率いたカリスマ的指導者の名である。

バリッジには、この運動が道徳再生の運動であると映った。そしてこの道徳再生のためには「神話夢（myth-dream)」が中心的な役割を果たす。これは在地の信仰とキリスト教の教義が混ざり合ったもので、新たな出来事を解釈する枠組みとして機能する。カルトの指導者たちは、この「神話夢」と現実世界を結びつけることで、白人の権力や富を、そしてその秘密を理解していく。バリッジは、こうしたカーゴカルトにおける「もっとも重要なテーマは、道徳の再生、つまり新しい人間（New Man）の創造、新しい統合体の創造、新しい社会の創造である」[Burridge 1960: 247］と述べる。祖先たちは、自分たちのためにカーゴを送ってきてくれるが、白人たちはそれを横取りしている。そのカーゴを奪い返すには、神話夢を通して「新しい人間」にならなければいけない。「そうすればカーゴはやってくる。マンブーを通じて、神話夢は待つ期間と学びの期間を助言してくれる。だが、この現在の苦境のなかで、そのような未来を待つことができるのだろうか。タングーの人たちは、死んでしまう50年後ではなく、生きている今、人間になりたいのだ。…カーゴへアクセスすることは、人間であること（manhood）の象徴であった」[Burridge 1960: 259]。

この新しい人間像を希求するというモチーフも、カーゴカルトのなかではしばしば登場する［Lindstrom 2018: 6]。それは決して差別や侮蔑を受けない、白人と対等な人間であった。人々のカルト的行為の目的が、カーゴの奪還だけではないという点をいち早く指

摘したバリッジの慧眼は驚嘆に値する。ただバリッジにおいてもカーゴを入手することと「新しい人間」になることは同義だった。

だがアネイチュムの老人たちはそうは考えない。現金を手にすればビッグマンになれると考える若者たちを陰に陽に批判する。繰り返すが、若者たちが諌められるのは、単に現金を追い求めたからではなく、目的を達成するための手段があまりに非合理的だからだ。リンドストロームは「メラネシア人自身も、政治的ライバルの滑稽な計画や主張に憤慨したときに、この言葉（kago kalt）を互いにぶつけ合っている」[Lindstrom 2018: 10]と述べている。富を追求するから「カーゴカルト」なのではなく、その手段が「滑稽」だから「カーゴカルト」なのだ。彼らが抱いているデヴェロップメンの胡散臭さの一端は、こういうところにあるといえるだろう。

そう考えると、海の向こうからやってきたのは「カーゴ」ではない。メラネシアを発端とする「カーゴカルト」という概念が、一度、人類学のなかで練磨され、「デヴェロップメン」という衣を纏って、アネイチュムへと逆輸入されたのだ。

冒頭で述べた通り、「カーゴカルト」という概念は常に危うさを持っているし、メラネシア社会に容易に適用すべきではないというのが、現在のトレンドである。ただ、カーゴカルト概念の放逐は、政治的正しさと引き換えに、彼らから「非合理性」を奪ってしまった。リンドストロームなどは、それを西洋人の欲望に対する「専売特許」のように用いる。だが、本稿で示したように、メラネシア社会にも「合理的な目的と非合理的な手段の結びつき」は存在する。とくにアネイチュムの場合、デヴェロップメンという概念が社会に実装されることで、彼らの考える「誤った理路」がくっきりと輪郭をあらわしたのだ。もちろん政治的正しさに一定の配慮は必要である。だが人類学は、彼らの理路を分析する視座まで放棄してはならない。

まとめ

アネイチュムでは観光業を発端として、島が緩やかに対立しはじめた。本稿はこの対立を両面から描いたものである。まず推進派からすれば、観光業は島にデヴェロップメンの思想をもたらすものであった。それは観光業にとどまらず、多方面への投資、開発が推奨される。そしてデヴェロップメンは、島の発展だけではなく、人間の変革も含意している。若者のなかには現金を貯めることがビッグマンになれる手段だと考える者も出始めた。

他方、観光慎重派からすれば、これは大きな誤りである。ビッグマンになるには、個人主義に走らず、アクロウしなければならない。つまり「目的のための手段がおかしい」ということになる。

「合理的な目的と非合理的な手段の結びつき」をカーゴカルトの定義とするならば、デヴェロップメンはカーゴカルトと親和性をもつことになる。彼らはどれだけ現金を貯めようとも、ビッグマンにはなれない。それは到来しない飛行機を待って滑走路の上で旗を振り続けるカルティストのような悲しみさえ覚える。

だが、このデヴェロップメンの考え方や実践が、ある程度までは社会に実装されたことも事実である。これからも若者たちは現金を追い、開発を誘致し、それを「豊かな生活」と考えるだろう。高齢者たちが眉をひそめつつ黙認するのか、行き過ぎたデヴェロップメンに反旗を翻すのかはわからない。グローバ

ル化は社会を大きく変えるという一般論を念頭に置きつつ、こうした小社会のなかで人々の取捨選択をつぶさに見ていくことが、これからの人類学には求められている。

註

（1）本稿2章および3章は、別稿［福井2017, Fukui 2020］と一部重複している。

（2）1豪ドルは、約90円。

（3）島民の女性が、女性観光客（女児が多い）の髪を細かく編み上げる。現在、数店舗が出店しており、どこも人気である。店や髪の長さや編み方によって値段は違うが、概していえば10～15豪ドルほど。

（4）ヴァツ（vatu）はヴァヌアツの通貨単位。1ヴァツは約1円。

（5）イニェグには落ち葉や生活ごみだけでなく、沿岸部には大量の軽石が漂着している。近隣のタンナ島の火山の噴火によるものだと言われているのだが、これを観光客が来る前に除去する必要がある。通常、10名程度の者が前日に泊まり込んで清掃を行う。

（6）ヴァヌアツの人々は、深い同情を示すときに舌打ち（日本では動物を呼び寄せるときにするようなもの）をすることがある。

（7）ビスラマ語Bislamaは、ヴァヌアツの国語。島では主に現地語が話されているが、都市部や他島民と会話するときにはビスラマ語が用いられる。

（8）例外的にいくつかの短報が、連日、掲載された出来事がある。まず2018年12月の地震と津波被害に関するものである（記事18、19）。そしてフランスの海軍船が政府からの上陸許可を得られず帰還したという記事である（記事25～28）。この記事の背景には、ヴァヌアツ南部マシュー島およびハンター島の領有権を主張する、ヴァヌアツと仏領ニューカレドニア双方の対立がある。ちょうど領有権問題が再燃しているときに、アネイチュムの中学校と診療所の改修資材を積んでいた仏海軍船が、上陸を拒否されたのである。これには与野党議員を含め多くの批判が噴出し、ヴァヌアツ外務省は同紙上で謝罪と釈明の記事を掲載した（記事26）。

（9）この点に関連して、記事52には、「すべての露店主は銀行口座に最低30万ヴァツの預金があると言われている」という記載もある。

（10）実際にはロブスターの販売などがあるが、店舗型のレストランはまだない。

（11）この点に関しては、研究会で発表を行ったことがある（「渇望としての歴史、他者としての歴史――ヴァヌアツ・アネイチュム島のチーフ継承問題」、島根大学法文学部社会文化研究交流会、2013年7月19日、島根大学）。

（12）ただし、筆者自身は耳にしたことがない。

参照文献

Abong, M. 2013 Metamorphoses of Nagriamel. In. M. Tabani and M. Abong (eds.) *Kago, Kastom and Kalja: The Study of Indigenous Movements in Melanesia Today.* pp. 59-84, Marseille: pacific-credo Publications.

Buck, P. 1988 Cargo-Cult Discourse: Myth and the Rationalization of Labor Relations in Papua New Guinea. *Dialectical Anthropology* 13 (2) : 157-171.

Burridge, K. 1954 Cargo Cult in Tangu. *Oceania* 24（4）: 241-254.

——— 1995（1960）*Manbu: A Melanesian Millennium.* Princeton: Princeton University Press（London: Methuen）.

Errington, F. 1974 Indigenous Ideas of Order, Time, and Transition in a New Guinea Cargo Movement. *American Ethnologist* 1（2）: 255-267.

福井栄二郎　2006 「観光における伝統文化の真正性——ヴァヌアツ・アネイチュム島の事例から」『日本オセアニア学会NEWSLETTER』84: 1-16。

——— 2008 「「伝統を知らない」老人たち——ヴァヌアツ・アネイチュム島における老人の現在と社会構築主義批判」『国立民族学博物館研究報告』32（4）: 579-628。

——— 2012 「想像の「オセアニア」——ヴァヌアツ・アネイチュム島観光におけるローカリティ」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』風響社、pp. 275-302。

——— 2017 「高齢者の包摂とみえない異化——ヴァヌアツ・アネイチュム島における観光業とカヴァ飲み慣行」風間計博編『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』ナカニシヤ出版、pp. 193-215。

Fukui, E. 2020 From Kastom to Developing Livelihood: Cruise Tourism and Social Change in Aneityum, Southern Vanuatu. *People and Culture in Oceania* 35: 85-108.

Harding, T. 1967 A History of Cargoism in Sio, North-East New Guinea. *Oceania* 38（1）: 1-23.

Jebens, H. 2004 Introduction: Cargo, Cult and Culture Critique. In. H. Jebens（ed.）*Cargo, Cult & Culture Critique.* pp.1-13, Honolulu: Hawaii University Press.

Jebens, H.（ed.） 2004 *Cargo, Cult and Culture Critique.* Honolulu: Hawaii University Press.

Kaplan, M. 1995 *Neither Cargo nor Cult: Ritual, Politics and the Colonial Imagination in Fiji.* Durham N.C.: Duke University Press.

春日直樹　1996 「「発端の闇」としての植民地——カーゴ・カルトはなぜ「狂気」だったか」山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化——人類学のパースペクティヴ』新曜社、pp. 128-151。

Lawrence, P. 1964 *Road belong Cargo: A Study of the Cargo Movement in the Southern Madang District, New Guinea.* Manchester: University Press.

Lindstrom, L. 1993 *Cargo Cult: Strange Story of Desire from Melanesia and Beyond.* Honolulu: University of Hawaii Press.

——— 2000 Cargo Cult Horror. *Oceania* 70（4）: 294-303.

——— 2013 Even More Strange Stories of Desire: Cargo Cult in Popular Media. In. M. Tabani and M. Abong（eds.）*Kago, Kastom and Kalja: The Study of Indigenous Movements in Melanesia Today.* pp. 169-185, Marseille: pacific-credo Publications.

——— 2018 Cargo Cult. In. F. Stein（ed.）*The Cambridge Encyclopedia of Anthropology.* https://www.anthroencyclopedia.com/entry/cargo-cults

——— 2019 Cargo Cult Post Mortem. In. E. Hirsch and W. Rollason (eds.) *The Melanesian World.* pp. 359-374, London; New York: Routledge.

Mair, L. 1948 *Australia in New Guinea.* London: Christophers.

McDowell, N. 1988 A Note on Cargo Cult and the Cultural Construction of Change. *Pacific Studies* 11: 121-34.

Otto, T. 1992 From Paliau Movement to Makasol: The Politics of Representation. *Canberra Anthropology* 15 (2) : 19-68.

——— 2009 What Happened to Cargo Cults?: Material Religions in Melanesia and the West. *Social Analysis* 53 (1) : 82-102.

Reeves, K. and Cheer, J. 2015 Examining Vanuatu's World War II Memorial Places and Events. In. K. Reeves, G. Bird, L. James, B. Stichelbaut and J. Bourgeois (eds.) *Battlefield Event: Landscape, Commemoration and Heritage.* pp. 176-187, London: Routledge.

Silverman, E. 2012 From Cannibal Tours to Cargo Cult: On the Aftermath of Tourism in the Sepik River, Papua New Guinea. *Tourism Studies* 12 (2) : 109-130.

Smith, M. F. and Schwartz, M. 2021 *Like Fire: Paliau Movement and Millenarianism in Melanesia.* Acton: ANU Press.

Sullivan, N. 2005 Cargo and Condescension. *Contemporary PNG Studies* 3: 1-13.

Tabani, M. 2008 Political History of Nagriamel on Santo, Vanuatu. *Oceania* 78 (3) : 332-357.

——— 2013 What's the Matter with Cargo Cults Today? In. M. Tabani and M. Abong (eds.) *Kago, Kastom and Kalja: The Study of Indigenous Movements in Melanesia Today.* pp. 7-27, Marseille: pacific-credo Publications.

——— 2017 Development, Tourism and Commodification of Cultures in Vanuatu. In. E. Gnecchi-Ruscone and A. Paini (eds.) *Tides of Innovation in Oceania: Value, Materiality and Place.* pp. 225-260, Acton: ANU Press.

Tabani, M. and M. Abong (eds.) 2013 *Kago, Kastom and Kalja: The Study of Indigenous Movements in Melanesia Today.* Marseille: pacific-credo Publications.

棚橋訓 1996 「カーゴカルトの語り口——ある植民地的／人類学的言説の顛末」青木保他編『思想化される周辺世界』(岩波講座・文化人類学 第 12 巻)、岩波書店、pp. 131-154。

Wanek, A. 1996 *The State and Enemies in Papua New Guinea.* London: Routledge.

ワースレイ、P. 1981 『千年王国と未開社会——メラネシアのカーゴカルト運動』(吉田正紀訳)、紀伊国屋書店。

吉岡政德 2005 『反・ポストコロニアル人類学——ポストコロニアルを生きるメラネシア』風響社。

——— 2016 『ゲマインシャフト都市——南太平洋の都市人類学』風響社。

——— 2020「トゥラガ・ネイション (その 2) ——伝統と近代の相克」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』128: 1-25。

Vanuatu National Statistic Office (VNSO) https://vnso.gov.vu/index.php/en/

Vanuatu Daily Post

https://www.dailypost.vu/

Cargo Cult as Reimported: Tourism and Development in Aneityum, Southern Vanuatu

FUKUI Eijiro

Cargo Cult as Reimported: Tourism and Development in Aneityum, Southern Vanuatu

On Aneityum Island in Vanuatu, the islanders began to slowly confront each other because of the tourism industry. The purpose of this paper is to explain this conflict from both sides. From the perspective of the proponents, mainly young people, tourism brings the thought and practice of development (developmen in Bislama) to the island. They praise diverse development and investment, not just tourism. The thought of development implies not only the change of the island, but also the self-transformation of them. Some young people have begun to see saving cash to become politically powerful men (Bigman). On the other hand, from the perspective of the tourism cautious, mainly elderly people, this is a big mistake. To be a bigman, a man has to share (*akro*), not be individualistic or selfish. In other words, to them, the means to the end is wrong.

If the most simplified delineation of cargo cult is “a tragic relationship between rational ends and irrational means,” as Lindstrom stated, this thought of development can be thought of as a cargo cult. Young people will never become Bigman, no matter how much cash they save.

However, it is also true that this thought and practice of development has been embedded in society to some extent. Young islanders will continue to chase cash, attract development, and think of it as a “rich life.” I don't know if elderly people will reluctantly accept this, or if they will revolt against the overdevelopment. While keeping in mind the general theory that globalization will drastically change societies, the future of anthropology is required to take a close look at the choices people make in these small societies.